

高齢者住宅・福祉の創造的協調型まちづくりの 実践的研究

ー ウェルビーイングの居住環境モデルに向けてー

主査 延藤 安弘*¹
委員 宮西 悠司*² 乾 亨*³
〃 森永 良丙*⁴ 齊藤 由佳*⁵
〃 森 詳子*⁶

キーワード：1) コレクティブハウジング, 2) 公営住宅, 3) 共生型集
住体, 4) 高齢者, 5) コミュニティ, 6) 自立, 7) 相互
扶助, 8) 住居集合, 9) ワークショップ, 10) 参加

1. 研究の背景と目的

阪神・淡路大震災の復興まちづくりにあたり、地区レベルの住宅復興と、福祉整備の有機的な連携のしくみづくりは緊急の課題である。とともに、それは、復興まちづくりの文脈だけでなく、高齢化していくこれからの社会全体の計画的課題である。そこで問われていることは、近代が分解してしまったあらゆる生活の要素が、やわらかく接続され、住宅と福祉、空間と生活、物質と精神の協調作用のもとに、有機的集住体が、地区の物的・社会的環境の網目の中で緊密に成立することである。

これまで、本研究会メンバーは、神戸市長田区真野地区をとりあげて、住民主体のまちづくりのプロセスを研究してきており、震災後も、緊急避難期から応急復旧期に至る今日まで、地区の状況に参画し、Participant Conceptualizer（参加型研究者）としての活動を継続させてきている。

本研究の目的は、地区復興まちづくりにおいて、住み手間のささやかな生活的連帯、相互ケア、住み手と専門家間の協働的連帯から生まれる集住の社会的創造の機運を、本格的な高齢者住宅・福祉施設の整備計画に、十分に生かしきるためのハード・ソフトの諸条件を明らかにすることにある。その中でも、この研究報告の第1段階としては、日本ではじめての参画型^(注1)コレクティブハウジング^(注2)(神戸市真野地区)の計画・建設過程に光をあて、その成立過程を、内発的居住文化発展として捉え、住民の意識高揚と空間形成の相互作用として明らかにすることを基本的ねらいとしている。

本研究の主題がコレクティブハウジングにブレークダウンすることの意味は、次の通りである。コレクティブハウジング供給目的には、従来の住居集合というモノの供給に加え、共同居住のコミュニティ育成・支援がある。居住者間、及び周りの住民側からの支援等によって育て

られる高齢者居住・福祉の横断化は、Welfare（福祉）という公共による福利の整備の意味をこえて、Well-being＝「一人ひとりがよりよく生きる」という、自立と支え合いの、住宅・福祉の緊密な関係による居住状況の新しい概念を明確にする点にオリジナリティがある。従って、Well-beingの居住環境モデルとしてのコレクティブハウジングの成立過程を考察し、その根拠を明らかにすることが、本研究のこの段階での具体的な目的である。

2. ウェルビーイングの居住環境モデルとしてのコレクティブハウジング

Well-being＝「一人ひとりがよりよく生きる」という、自立と共助の住宅・福祉の緊密な関係の居住状況を生成する手法として、コレクティブハウジングをあげることができる。

コレクティブハウジングとは、スウェーデンではじまった共生型集住体である。その現代的成立は、1970年代の女性運動と新しい居住運動を推進力として生まれた、BiGグループの“小さなコレクティブ”提唱を起点としている(1977年)。そこに明示された4要件^(注3)は、ここでとりあげる真野コレクティブハウジングとほぼ符合している。

①小さな規模＝20戸から50戸の間（真野は29戸）、②協働＝共に住むことに関わる日常的仕事を分担する（これからその方向を目指す議論をおこそうとしている）、③自主管理＝管理にテナントの民主的参加がある公的賃貸住宅（神戸市は住民分権、行政後方支援の方策を試みようとしている）、④多様なテナント＝多世代、多様な社会的グループのつきあいがあること（シルバーハウジング20戸＋一般世帯9戸、地区内の多様な活動との連携を目指している）。

スウェーデンのコレクティブハウジング研究の第一人

*1 千葉大学工学部 教授

*2 神戸地域問題研究所 所長

*5 名城大学理工学部 大学院生

*3 立命館大学産業社会学部 助教授

*6 千葉大学工学部 研究生

*4 日本学術振興会 特別研究員

者による現代的なコレクティブハウジングの条件は、①協同の食事運営に関する何らかの義務があること、②インドアで居住者の密接なふれあいがあること、③すべての人に開かれていること、④私的な住戸が完備していること、である。②③④は共通しているが、真野では、①の具体的展開がどのようになされるのか、今後の推移を見守る必要がある。

本研究では、このような視点から、ウェルビーイングの居住環境モデルとしてのコレクティブハウジングという位置づけをする。

3. 真野地区と計画地周辺の状況

3.1 コレクティブタウンとしての真野地区

計画地は神戸市長田区真野地区のほぼ中央に位置し、周辺地域は北寄りが準工業地域で、南寄りが工業地域になっており、計画地の南側隣接道路「東西大通り」がその2用途地域の境界になっている。真野地区のまちづくり将来像（1980年提案のまちづくり構想）での土地利用構想では、ほぼ東西大通り以北が住宅街区、以南が工場街区となっている。

真野地区は下町で日用品店舗、喫茶店、飲食店、銭湯、散髪屋、クリーニング店等の日常生活サポートの施設が多く、これらが高齢者の日頃の暮らしよさをカバーしており、町全体がコレクティブタウン（協同居住の町）である。

また、地域活動の拠点として地域福祉センター、デイサービスセンター、児童館の建設が進められており、地域組織である「ふれあいのまちづくり協議会」による地域福祉活動がより強化されるであろう。

一方、地区内の住宅の建設状況は、公営住宅が2ヶ所（市営真野住宅107戸と市営東尻池住宅20戸）が建設済みで、今後シルバーハウジングの（仮称）東尻池第2住宅20戸、（仮称）東尻池第3住宅16戸と当計画のコレクティブハウジングの建設が進められている。共同建替や長屋建替のモデルとなる住宅も建設されており、震災後にも共同建替が「東尻池コート」（住宅18戸、店舗2戸）として成立した。

また、「まちづくり用地」として工場や駐車場跡地、住宅跡地の買収があり、今後も引き続き環境を更新していくまちづくりのための種地が用意されている。当計画のコレクティブハウジング計画地も、そのようなまちづくり用地のひとつである。なお、真野地区のまちづくりについて特筆すべきことは、公益法人「真野っこ」の設立がある。30年に及ぶ住民主体のまちづくり活動から生まれたもので、震災後に設立された。コレクティブハウジングの協同居住のための支援（コーディネーター等の人材派遣、育成）が期待できそうである。

3.2 計画地周辺の状況

計画地（敷地面積約1,200㎡、法定建蔽率60%、法定容積率200%）は、まちづくり構想の土地利用構想で住宅街区の中に位置づけられており、周辺隣接地の状況は図3-1に示すような環境条件をもつ。

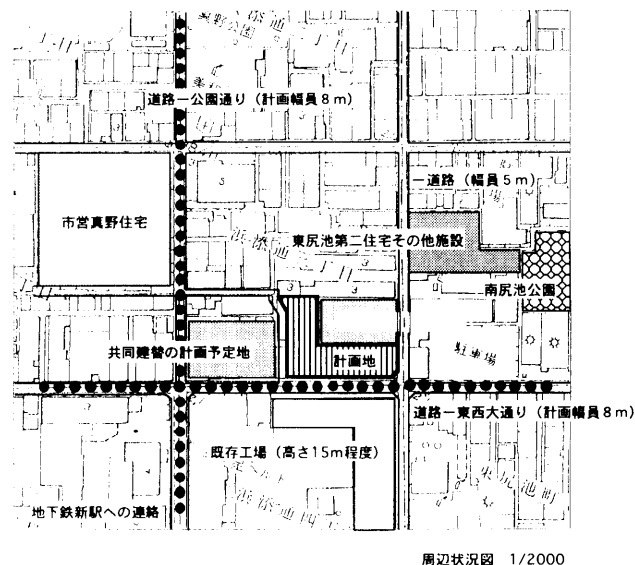


図3-1 計画地周辺状況図

4. 真野コレクティブハウジングの成立の背景

集住文化の創造に関わる条件は、空間構成技術だけでなく、伝統的居住空間、住居観、意識高揚の手段、行政的しくみ等の多岐にわたる。すべての創造は、客観的な必然性を満たしつつ行われることによって、はじめて品格を獲得する。

すべての集住文化は歴史的に、かつ、場所が違えば違った風に生じる。真野コレクティブハウジングの成立の背景には、次の5つの条件が相互に絡み合ったひとつの時代のうねりがある。

4.1 内発的居住文化の発展

第1に真野地区の下町居住文化の蓄積である。神戸市長田区真野地区は、工住混在・道路狭隘の下町である。地区全体に張り巡らされた路地は、対面性の特徴的な空間による人間関係の絆の形成、軒先・道端園芸による住戸近傍空間の領有化の生成という、二重の積極的な集住文化をもたらしてきている。

路地の多い居住環境は、人間関係と領有化生成の集住文化を生み、その文化によって住み手の住生活は保持され、覆いつつむ雰囲気の中でのみ住み手は息をつくことができる。よその文化を押しつけない内発的居住文化発展の必然性が真野地区にはあり、路地文化が日本型コレクティブハウジングを創造する機運を高める背景にあった。

4.2 都市集住ムーブメント

核家族・高齢化・少子化・女性の社会進出・余暇時間の増加等の社会的状況のもとに、個人重視のプライバシーの中に埋没した閉鎖的住まい方から、周りの人々とゆるやかに結び合う開放的なトモニキル住まい方が、コーポラティブ住宅づくり等を通して実現されてきている。そうした都市集住ムーブメントは、さらに進んだスマートな個性と、豊かな共同性の結合スタイルを潜在的に求める機運を醸成している。

4.3 コレクティブハウジングの啓蒙活動

これに呼応して、近年、小谷部ら^(注3)による海外のコレクティブハウジングを系統的にわが国に紹介、啓蒙する動きが活発であり、日本型のそれを生み出す気運づくりを醸した。また、震災後石東らはコレクティブハウジングの実現に向けて奔走した^(注4)。

4.4 高齢社会の望ましいハウジング

高齢者向けに普及しつつあるシルバーハウジングは、居住者とL S Aの関係はあるが、居住者間の交流と支え合いの関係づけが薄い。加えて、多世代共生のしくみが欠如している。真の安心居住をもたらす高齢者向けハウジングでは、これを満たすことが期待されている。

4.5 震災後の仮設住宅居住にみる有機的な集住

阪神・淡路大震災の仮設住宅は、必然的に住み手間の相互扶助の暮らしを生み出した。とりわけ、高齢者の集まり住み合う新しい文化のしるしの現場が、芦屋市呉川町の「ケア付き仮設住宅」に生み出された。そこでは、近代が分解してしまったあらゆる生活の要素がやわらかく連携され、空間と人間、住宅と福祉、物質と精神の協調作用のもとに、有機的集住体が織りなされている。それは、日本型コレクティブハウジングの具体的表れである^(注5)。

以上のような背景のもとに、神戸市は災害公営住宅建設計画の一環として、真野地区にコレクティブハウジングを建設することを英断した。

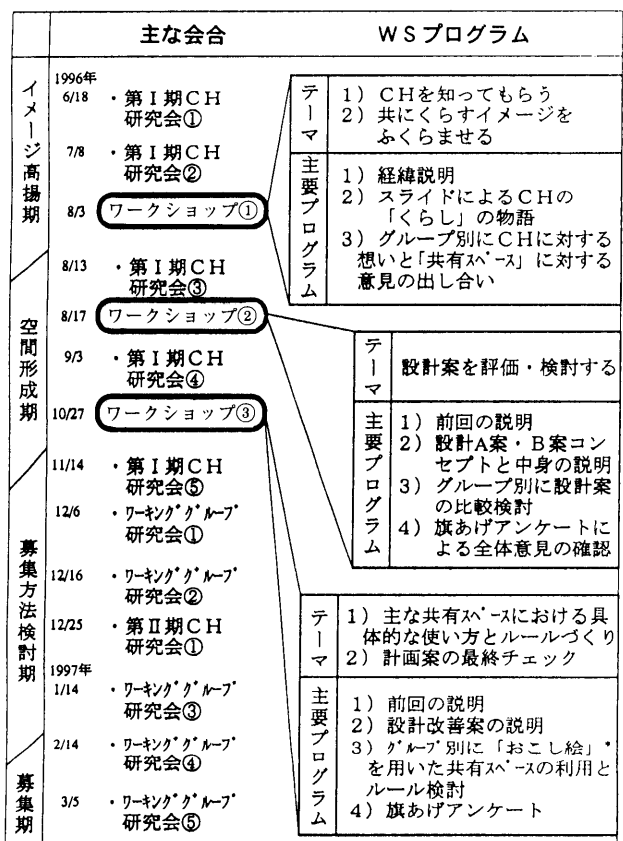
5. ワークショップの構成

真野コレクティブハウジング建設にあたり、筆者も参加した研究会（宮西悠司座長）が開かれた。当初は、研究会でのみ計画案のハードとソフトを検討することになっていたが、協同居住への本源的な創造力の発動のために、住民参画による設計過程の必要性・可能性の提案をし、研究会と行政の了解が得られた。

公営住宅故、入居者を前もって選ぶことができないことを補って、主に仮設住宅居住者に疑似ユーザーになってもらうかたちで、ワークショップを行うことになった。

ワークショップは、住民と行政と専門家の協働の住まい・まちづくりを進めていく上で、3つの基本的役割、効果をはらんでいる。ひとつは、住民の協同居住への「その気づくり」（ビジョン・ゲーム）。2つ目に、各主体のつぶやきの響き合いによる個性的・合理的「かたちづくり」（デザインゲーム）。3つ目に、できたハード・ソフトをユーザー自らが運営・管理・育成していく「しくみづくり」（マネジメント・ゲーム）。前2つのワークショップを建設前に行い、後者は、入居者が決まってから行うことにした。

建設スケジュールの関係から、設計ワークショップは3回開くことになった。その流れは、図5-1に示す通りである。



*紙に描かれたスケールのあった人や植木鉢などを切り抜き、図面上に立てて、住民が空間利用如何をチェックするための小道具

図5-1 ワークショップの流れとテーマ

6. ワークショップにおける意識変容の仮説

設計過程にワークショップを活用することは、二重の意義がある。第1に、住み手予備軍の協同居住への関心を高め自覚を促すこと、第2に、意識高揚をエネルギーにして、新しい時代の集住体のハード・ソフトの設計・建設に赴くことである。問題は、どのようにして住民の意識高揚を図りうるのか、意識高揚のブラックボックスをどのように解明しうるのかである。そこで、ここでは、

ワークショップにおける意識変容の形成・把握の仮説をあげ、後に続く分析・考察の枠組みに資したい（図6-1）。

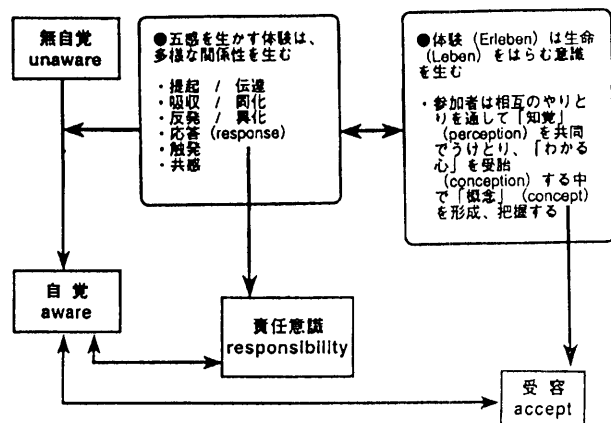


図6-1 ワークショップによる意識変容の仮説

まず、意識変容の軸を、「無自覚」から「自覚」への流れと捉える。対象に対して気づきの心をもたない「無自覚」(unaware)の状態から、対象への内的な気づきの心が呼び覚まされる「自覚」(aware)の状態への移行を促すためにワークショップが行われる。

ワークショップは、人々の五感を動員する多様なコミュニケーション体験を引き出す。情報が視覚的に聴覚的に伝達される中で、人々はある部分を吸収し同化すると共に、ある部分に対して反発を覚え、対立の感覚表現は、場に異化効果を生成する。安定した関係の場が攪乱されると、新しい安定を求めて意見の応酬が行われ、自由応答が紡がれ、相互触発のうちにやがて共感を覚える関係の発見に至る。このような「応答」(response)の体験がふりつもと、主体の心の中に対象に対して、自ら関わろうとする「責任意識」(responsibility)が芽生えていく。

参加者の感覚が生彩をもって開かれる体験(erleben)は、生命(leben)をはらむ意識を生み出していく。相互のやりとりを通して「知覚」(perception)を共同で受けとめていくこと、すなわち、「わかる心」を「受胎」(conception)するうちに「概念」(concept)の形成・把握に至る。

7. ワークショップにおける住民の発言と計画内容の変遷

阪神・淡路大震災後の仮設住宅には、厳しい条件下ではあるが、居住者間の相互扶助や外からの生活支援システム等が生まれている。このような機運を捉えつつ、真野地区で地域住民参画のワークショップ(以下WS)によるコレクティブハウジング計画が進められた。この項では、その計画内容の変遷を考察し、これからの集住体

計画とWSの在り方について検討する。

7.1 WSに至るまで

専門家間で検討した最初期案は、北側廊下・専用バルコニーといった在来的なものであったが、真野地区の路地文化をいかした南面共用廊下を設ける方向を提起。法的規制・耐震性等を考慮してRC造3階建。

7.2 第1回WS(参加住民31人)

まず、具体的な計画案についてではなく、共同生活の主要機能としての、①コモンダイニング・キッチン、②共同浴場、③共同洗濯室・もの干し場の利用について議論し、相互に大まかな集住イメージを探る。

この段階で基本的な共同生活機能が選択される。コモンダイニング・キッチンについては、期待・要望・不安・疑問が多く出される中(表7-1中1~14)、共同/個別の生活のバランスを考慮する提案(同表中15~20)がみられるように、運営・管理のしくみについての問題が明確になるが、参加者はその価値を概ね了解していたといえる。共同浴場は地域に根づいた銭湯のよさ(同表中28)、共同洗濯室は、洗い物を一緒にすることへの心理的拒否感(同表中29)についての発言が参加者の納得と合意を得て、両機能は計画に組み込まないこととなった(写真7-1)。



写真7-1 ワークショップ第1回目では、住民たちは何を共同化するかについて語り合った

7.3 第2回WS(参加住民21人)

1回目の議論にみられた住民意向と、私空間と共空間の関係パターンを整理したものが図7-1である。この図は、この日に討議された2案を概念的に位置づけるものであった。すなわち、共同/個別の生活空間を明確に分けた「広場文化」指向のA案と、土間型DKを積極的に活用して私的領域に共用の性格をもたせ、小グループで共同生活を行える「路地文化」指向のB案の2つが提示される(図7-2、図7-3-I)。

表7-1 第1回WSでの住民の代表的発言

<p>【コモンダイニング・キッチン】 (共同化することへの期待・要望)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.一人暮らしの老人にとっては断然安心な住宅だ 2.今の仮設住宅でも台所が一緒。たくさんつくっておすそ分けをしている。これがいい。 3.仲良く話しながら食べた方がおいしい 4.知らないことを知る。料理の研究とか。これは共同生活の利点 5.料理のつくり方等を教え合えるような大きめのキッチン 6.一人では持てないあまり使わないオープン等を共同で持たたい 7.障害者も食事づくりに参加できる台所がほしい <p>(運営・管理への不安・疑問)</p> <ol style="list-style-type: none"> 8.一緒に料理・食事をするのは楽しそうだが、毎日となるとしんどい 9.毎日一緒に食事だと時間に縛られてしまいそう 10.一人暮らしなので、やはり気ままにしたい 11.食事をつくるのが苦手な人はどうするの? 12.味があうとかあわないとかあるかもしれない 13.毎日の暮らしは楽しく思えるけど、共同での食事の金銭面等は? 14.管理の仕方、掃除が大変では? <p>(一斉参加ではない緩やかな参加)</p> <ol style="list-style-type: none"> 15.月1回とかイベント日を定めて参加ならやりやすそう 16.年に2回、正月とお盆に近所の人に入ってもらって、大鍋を使って豚汁の炊き出しをしてみる 17.一人暮らしで食事の準備が難しい人は、健康管理やコミュニケーションをかねて無理のない回数で自由参加に 18.最初はプロやボランティアに頼む <p>(ルールをつくる)</p> <ol style="list-style-type: none"> 19.入った人で話し合い自分たちでルールをつくる 20.御飯のつくり方のルールがしっかりしていればいい <p>【共同浴場】 (大きな浴室への期待)</p> <ol style="list-style-type: none"> 21.足の伸ばせるお風呂にゆっくりつかりながら、おしゃべりしたい <p>(個別の浴室)</p> <ol style="list-style-type: none"> 22.好きなどきに入りたいので、お風呂は各自の部屋がいい 23.風呂は小さくても各戸にあった方がいいと思う <p>(運営・管理への不安・疑問)</p> <ol style="list-style-type: none"> 24.共同浴場、掃除が大変 25.お風呂の掃除は重労働。老人世帯で当番がこなせるか? 26.お風呂の利用時間は? 27.個人のものとは別に共同の風呂があると経費がダブってしまう <p>(まちの銭湯を利用)</p> <ol style="list-style-type: none"> 28.自分の家にお風呂があっても、支度が面倒で銭湯に行くことがある。銭湯には友達がいる <p>【共同洗濯室・物干し場】</p> <ol style="list-style-type: none"> 29.他の人と洗濯機を共有するのは気持ち悪いからイヤ 30.屋上に共同の洗濯物干しがあればいい 31.屋上物干しに行くの大変。専用ベランダがいい <p>【生活の共同化/個別化のバランス】</p> <ol style="list-style-type: none"> 32.基本的に各自の部屋割りや設備を充実させて、その上で共同スペースをつくる 33.一人になれる所があればよい
--

前回の成果を受けて計画されたB案に議論が集中する中で(表7-2中34~47)、グループ入居の必要性が明確になっていく(同表中37, 39, 43)。さらに、異化作用が働き、1階コモンダイニング・キッチンに集うことの意味を自覚した発言が出てくる(同表中48~50)。土間型DKが一住戸内に計画されたものは決定案まで継承される(図7-3-Ⅱ, 写真7-2)。

7.4 第3回WS(参加住民15人)

前回の成果を統合した計画案をもとに、利用イメージについて話し合われた。この段階では、行為と形態が一体となった具体的で多様な集住場面について、自分自身が利用するような内容として発言されたものが多い(表7-3中51~64, 図7-4)。また、土間型DKの開放的な利用イメージも提案されている(同表中67)。計画内容の理解と集住の意味の理解が深まっている。

表7-2 第2回WSでの住民の代表的発言

<p>【小グループ対応土間型食堂・台所】 (小規模な共同化への期待)</p> <ol style="list-style-type: none"> 34.3軒のまとまりであれば、自分たちでルールを決めてやりやすい 35.助け合って住めるので気に入った 36.仮設住宅でよくおすそ分けを持ってきてくれるFさんが、大きいキッチンのある家に入居できたらいい 37.B案は小さな仲良しグループができて良い。精神的安心感を得る 38.大きな全員共同の台所よりも少し大きめ位の方が使いやすい 39.2~3戸でグループ入居なら、台所も共用でいい <p>(運営・管理への不安・疑問)</p> <ol style="list-style-type: none"> 40.1人・2人世帯は老人が多いと思うので、1DK、2DKにある小グループキッチン運営する力がないのでは 41.共同では夜中に簡単な料理をするのも気がひける 42.2~3軒で集まると、住宅全体のまとめが難しい 43.グループ入居ができないと大したメリットがない 44.A案の方がプライバシーがありそう <p>【2~3戸共用の浴室】</p> <ol style="list-style-type: none"> 45.自分でわかすのはしんどいので風呂は共同 46.台所の共有はかまわないけど、風呂の共有はまずい 47.風呂は共同にするなら銭湯に行く <p>【1階コモンダイニング・キッチンの意義】</p> <ol style="list-style-type: none"> 48.1階の共同食堂は、食事だけではなくみんなですごす場として重要になる 49.小グループキッチンだけより、1階の共同キッチンを使うことによって横のつながりができる 50.人のいる所に出ていけるようにするのがいい。火を使うのも安心
--

表7-3 第3回WSでの住民の代表的発言

<p>【1階コモンダイニング・キッチン】 (生活イメージとしつらえ・設備への要望・提案)</p> <ol style="list-style-type: none"> 51.お好み焼き・焼きそばができるようにテーブルをひとつ鉄板焼用にしておく 52.共同キッチンは、梅酒・梅干しを保存しておく所 53.カウンターはお袋の味朝食コーナー、おやじバーボンコーナー 54.焼きナス・焼き魚ができるように排煙設備をつける 55.動かせるイロリ。魚を釣ってきてイロリであぶって食べよう 56.10人位座れる卵形の大きさのテーブルがほしい 57.テーブルごとに鍋ができるように 58.大きいテーブルを最低ひとつ置いてみんなで育てた花を飾る(冬場の集い空間として) 59.屋上ソーラーをいかにして床暖房 60.和室を掘り炬燵にするのもいい <p>(その他1階共用部分の利用イメージ)</p> <ol style="list-style-type: none"> 61.何も無い部分が多い方が色々使えていい 62.新聞コーナーをつくってみんなで新聞をとる。 63.仮設の映画館ができる 64.1階の談話室(和室)を宿泊用のゲストルームに。 <p>【土間型DKの住戸】 (土間生活への期待)</p> <ol style="list-style-type: none"> 65.夏は良さそう。土間の家に住みたい 66.土間が広いので使い方は色々。住む人次第 <p>(生活提案)</p> <ol style="list-style-type: none"> 67.畳の部屋に鍵がかかるようにすれば、土間を開放的に使える 68.土間の冬の寒さ対策は各自でスノコを敷くとかする

7.5 小括

①課題・問題の輪郭を明確にする期待・不安・疑問等の自由な発言の場、②WSでの発話状況を洞察しコンセプトの立案方法を検討する専門家の機敏な対応、③参加者を触発する複数のコンセプト提案による異化効果、④生活者の身近な経験から発想できるような仕掛けが、計画コンセプトの理解の深化と、内発的居住文化の発展型としての日本型コレクティブハウジングを生み出すこととなった。

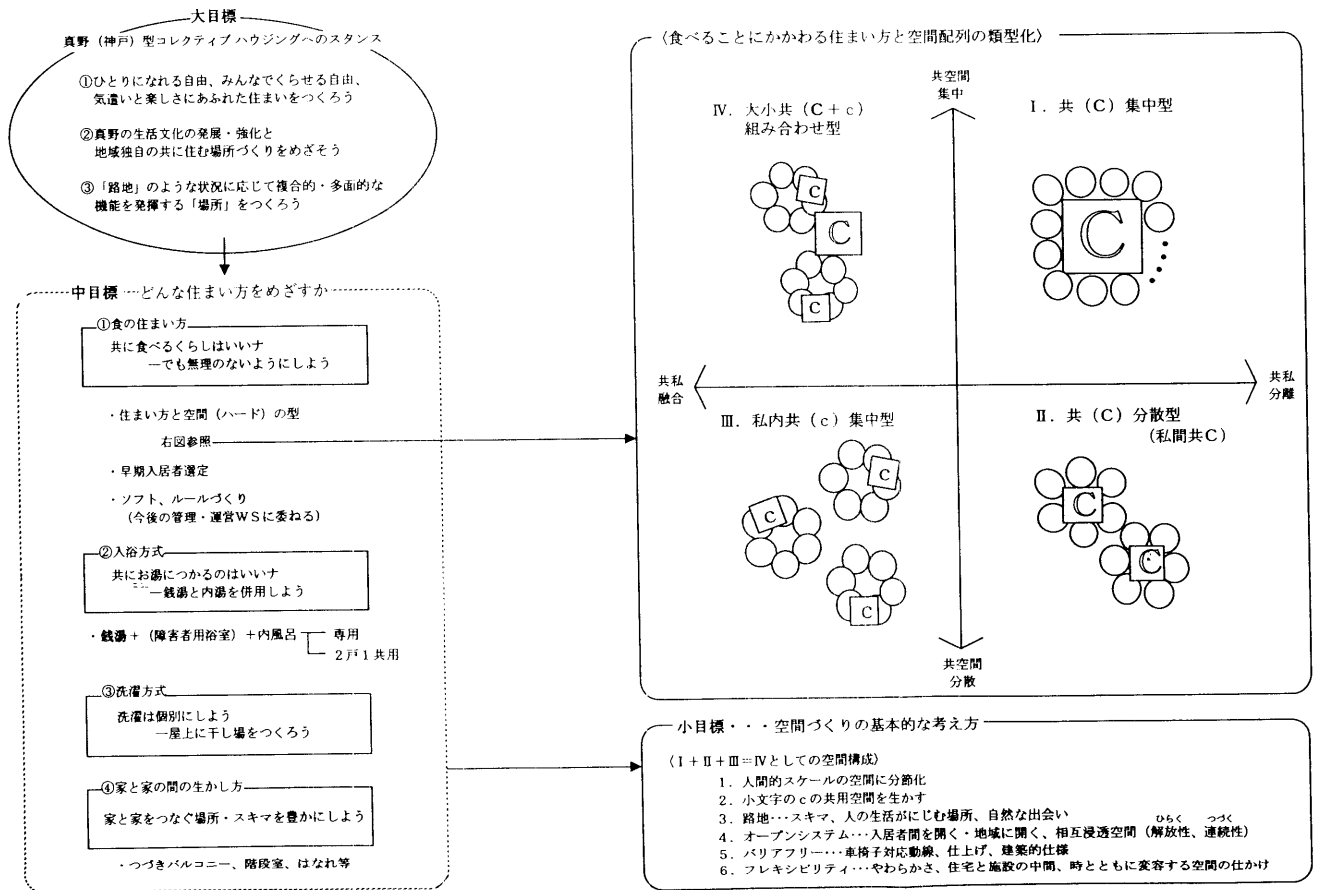


図7-1 住民の意向の集約にみる計画目標と空間タイプの諸相

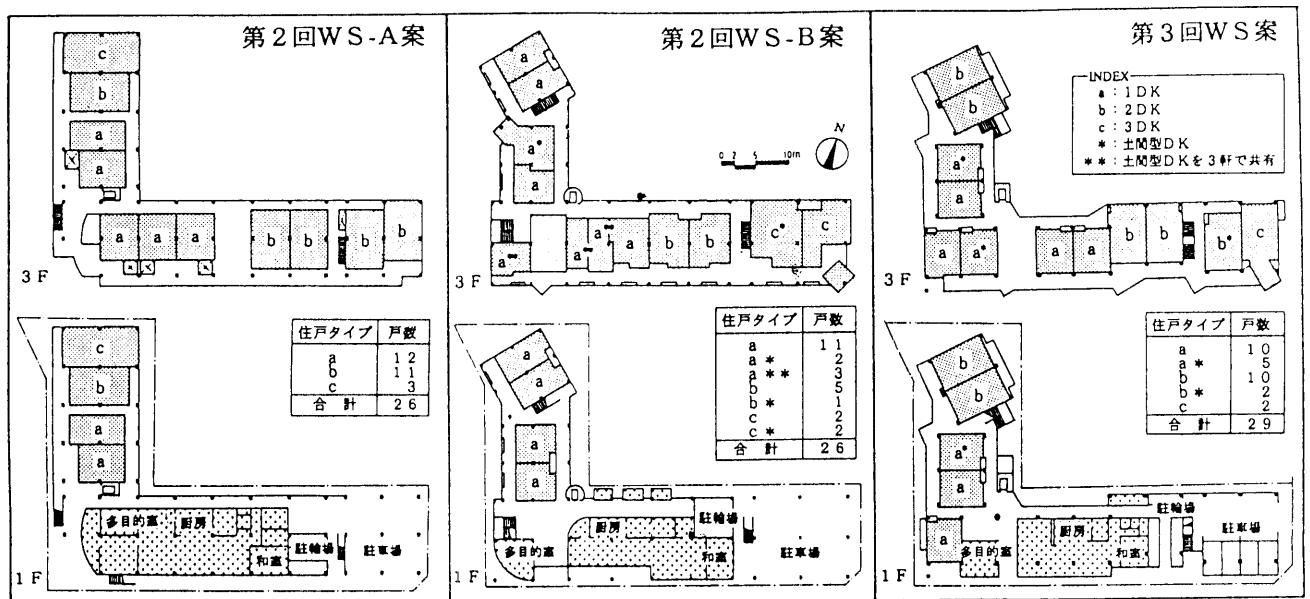
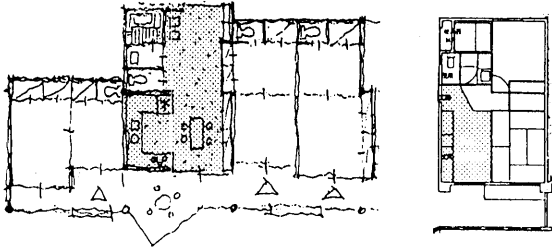


図7-2 WSで提示された平面計画案



I-第2回WS-B案(a**タイプ) II-第3回WS案(b*タイプ)
 図7-3 土間型住戸計画の事例

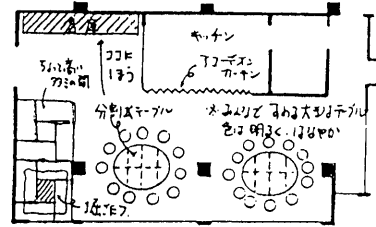


図7-4 第3回WSでのコモンダイニング・キッチン
 の利用イメージスケッチの事例



写真7-2 ワークショップには、90歳のお年寄りも積極的な発言を行った

8. ワークショップにおける参加主体の意識の変容プロセス

WS活用の意義は、参加者の対象に対する関心を高め、新しい価値や意味、空間、制度を生み出すことにある。WSを通して、ウェルビーイングの居住環境モデルが、どのように住民意識の中に浸透していくのかについて考察してみよう。

図8-1は、WSにおける意識の変容プロセスを示したものである。毎回のWSの流れをみていくと、主催者の呼びかけや、目標イメージ、設計案の提示に対して、参加者は受け入れたり反発しつつ、相対する意見や、自分にはない新しい価値観をはらむ意見とが相互に触発し合う中から、WSやコレクティブハウジングの意義を自覚し(図8-1中①・⑤)、協同居住に対する新しい価値観を創造し(同図中②~④)、そうした意識の高まりが、コレクティブハウジングにふさわしい入居者構成・募集方法を選びとる(同図中⑥)に至っていることがうかがえる。

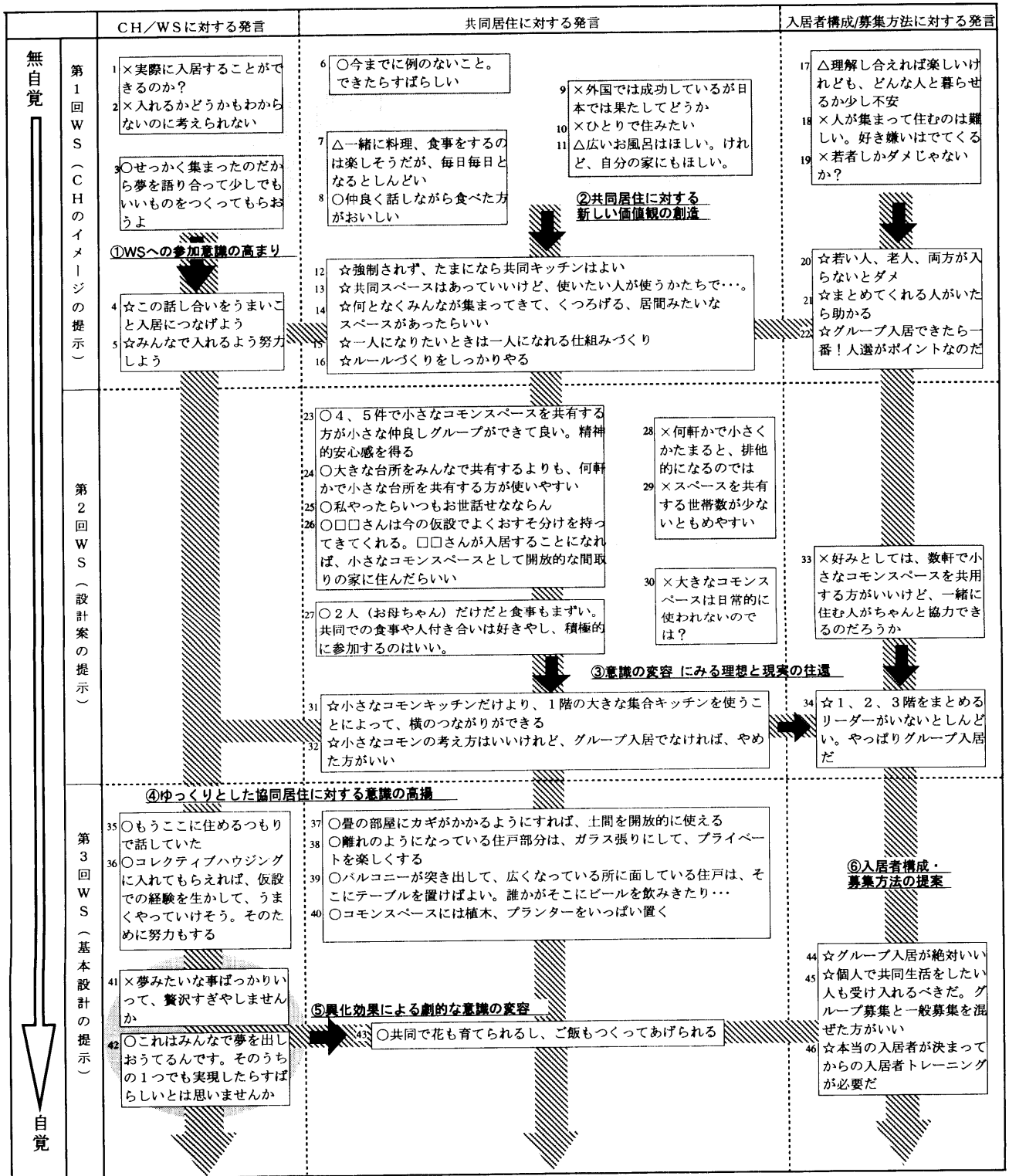
これらの意識の変容は、時として、予想をはるかに上回る柔軟性を持ち、かつ、非常に現実的であり、時間をかけておこる変容もあれば、一瞬のうちにおこるものもある。以下に、意識の変容の主要概念と具体的事例を述べる。以下の()内の数字は図8-1の意見と対応している。

8.1 WSの参加の意義

WSの参加者は、入居の可能性がある仮設居住者が多く、コレクティブハウジングと協同居住への夢を幻燈によって示すとともに、計画第1案を提案したことに対して「実際に入居できるのか(1)」という不安や、WSに対する不満(2)の声が多く出された。しかし、同じ仮設居住者の「せっかく集まったのだから夢を語り合おうよ(3)」という発言とのやりとりの中で、「WSへの参加を入居へつなげよう(4)」、「入居に向けて努力しよう(5)」というWSに対する参加の意義を見出した。そこには、不安と夢の共有化の状況の創発があった。

8.2 協同居住に対する新しい価値観の創造

第1回WSでは、「共に暮らす」ことは楽しい(6, 7)反面、わずらわしく難しい(8, 9, 10)ことであり、「共同」は「個の充実」の上に成り立つことが望ましい(11)といった、「共」と「個」の対立関係が、やがて、自由参加の協同居住(12, 13)、ゆるやかな参加の場(14)、コレクティブハウジングならではのしくみづくり(15, 16)という価値観の創造が行われた。協同居住を外からのorder・命令でなく、参加者のうちからのorder・秩序を図る志向が明らかにされた。



凡例 ○：肯定的発言 △：肯定と否定 ●：相互触発の場面 ↓：意識の自覚化 →：意識の流れ
 例 ×：否定的発言 ☆：共有された発言

図8-1 WSにおける意識の変容プロセス

8.3 意識の変容にみる理想と現実の往還

第2回WSでは、3～4軒が気軽に集える場としての小さなコモンと、大きなコモンの使い方をイメージしてもらったところ、小さいコモンの方が「精神的安心感が得られる(23)」、「使いやすい(24)」という評価が得られた。また、参加者自身の仮設住宅での暮らしからイメージを深める発言(25, 26)がおこった。一方で「事前に住む人が想定できなければ、この案はうまくいかない(32)」という判断も下された。反対に、大きなコモンは「日常的には使われない(30)」というやりとりがはじめはなされていたのだが、小さなコモンのやりとりとの絡みから、やがて、大きなコモンは「コレクティブハウジングをたばねる上で重要な場である(31)」という結論が出された。対比的な計画案の提示は、イメージの飛躍と現実的事態、及び、2案の相互補足的関係の意向を導き出した。

8.4 ゆったりとした協同居住に対する意識の高揚

第3回WSでは、住戸近傍のコモンに対して住戸の一部を開くことで「私的空間を楽しくする(37～39)」という発言や、「コモンスペースには花をたくさん植えたい(40)」という発言が出されるようになった。これは、過去2回にわたってコレクティブハウジングの暮らし方を考えてきたことが、「コモン」は特別で非日常的であるという意識から、身近で日常的なふるまいの中にこそ生き生きとした「共に暮らす」ことの意義があり、それならば「私でもやれそう(35, 36)」という自覚に至らしめるエネルギーになったといえる。responseがresponsibilityをさりげなく引き出している(写真8-1)。



写真8-1 路地イメージの南側廊下をどのように使うか

8.5 異化効果による劇的な意識の変容

第3回WSも終わりに近づいた頃、はじめて訪れた年配の女性が、みんなのコレクティブハウジングに対するやりとりを聞いた後、「私たちが仮設でつらい生活を送っているときに、何を夢みたいなことばかりいっているのだ(41)」と、怒りをあらわに発言した。それに対して「私たちも仮設に住んでいるから、あなたのつらさはよくわかります。でもここでは皆で夢を出しおうているんです。そのひとつでも実現したらすばらしいと思いませんか(41)」という発言があり、それに呼応して他の参加者も口々に暮らしのイメージを紹介した結果、その女性は「それはいい。それなら私は協同で花も育てられるし、ご飯もつくってあげられる(43)」と、あつというまに否定・不満の意識から、「ともに暮らす」本質的な意義をくみとるに到った。WSでは、平板な同調よりも意外な異化の状況がたち表れることによって、参加者の意識変容は触発される(写真8-2)。



写真8-2 テーブルトークの成果を「旗あげアンケート」で全体的に確認していく

8.6 意識高揚の中での居住者選定と募集方法の提案

協同居住のイメージが高まるにつれて、コレクティブハウジング成立のためには、老若混住(20)、まとめ役の存在(21, 34)、グループ入居(22, 34, 40)が重要な鍵を握るという意識が高まった。こうした発言が単なる要望・陳情ではなく、住民・行政・専門家が、水平的立場で論じた結論として表れたことは、各主体の責任意識の芽生えにつながり、WS終了後、行政と専門家が論議をかさねた末、グループ募集という新たな制度を生むに至り、主体間の創造的協働をもたらした。

8.7 小括

今回のWSに関わった住民・専門家・行政は、智恵をやわらかく結び合わせる多層のプロセスをたどる中で、「共に暮らす」ことに対する、現実的、かつ、創造的な

意識が確実に高まった。このことは、コレクティブハウジングの日本における成立と、公営住宅設計に対する住民参画の可能性の広がりを予見させるものである。

9. むすび

ここでは、真野コレクティブハウジング成立過程をウェルビーイングの居住環境モデルの生成として捉え、その成立の根拠の一端を明らかにした。今後、同住宅居住者入居前の管理・運営ワークショップの分析とともに、真野地区の一般住宅に居住する高齢者の居住状況と、周辺住民の支援活動の総体を「コレクティブタウン」の視点から解明し、ウェルビーイングの居住環境モデルを立体的に明らかにしていくことに赴きたい。

<注>

- 1) 入居者をあらかじめ特定できない公営住宅にあって、計画過程に排除(exclusive)されていた人々を、疑似ユーザー、または一部入居予定者として計画の意志決定に関わる計画を参画型(inclusive)計画という。ユーザー直接参加(participation)とは区別。
- 2) コレクティブハウジングとは「いつでも誰かに会えるし、いつでも一人になれる」「一人で食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう」という暮らしを実現する“協同居住型集合住宅”のことをいう。(神戸市営災害復興住宅・コレクティブハウジング・(仮称)浜添住宅基本計画報告書、真野コレクティブハウジング研究会、1996年12月)
- 3) 小谷部育子：コレクティブハウジングの勧め、丸善、1997年4月
- 4) 石東直子・小林郁雄氏らによる「コレクティブハウジング応援団」の活動
- 5) 延藤安弘：ハウジングは鍋物のように、丸善、1996年5月